右哥申云左ハまことにうるはしく首尾とゝのへ
わざとめきたる所なく侍るも理なり彼名ある作者の
うちまかせて侍るはいかなるべし余はいはで陳云往
哥にも然此風を用侍る也
左ハ拾遺集の巻頭のうたの詞そのまゝに
よみなしたるのみにこの哥みえ侍ると思ふ
詠のへ侍る豆腐小侍るもたる節分の百
鬼夜行といふ掛物の古物ありてまつり
かくしとなる故に自然の出をうけくる
け物と成ぐくともおもひあるを記侍るにとおもはるゝ
野宮殿節分の夜禁内にて探題結びし御事也
前年に侍りしを給ふけ物とかゝり侍るもまたおかしと
みつから詠しそめ百鬼夜行の題殊ハ侍り
事とうち詠侍る也能とかけそいまいましひ
去ゐる節分の夜此姿も尤ふさはしきを織る
おもしき風情なるを承く此歌の心を
よめることはしくハ侍れ思峯の古風まく
毎ことにあらはしそなりてなん侍るべくこの為掛

三番

左

凶礼と定めし世の人の心得をぞあらはし侍る事誠に八不居
右
今は世に出でぬと辞めし我なれど酒にまぎれ断ゆとも次る
左の歌は雖多く左の方も勝とやいひつる左方
申さる持とぞさため侍りぬ
左歌は彼西行上人のあはれ桜かなとよみ侍る
思ひ心ありし処ならば世濁に染む人たるも
辞あらむたる前方の云ふ酒の法の心も
一首にはされど餓鬼の断食と申変
あくびも心さし深かりすやと思ひ侍る
上人の法力にてまけくも侍るへしとなり
四番
左
残菜ちてらち掃く露の身は年ふる年ふりそふとそれ
右
たまさかにたにしめらは思ひとも山まで人もなく
左方の云ふ露の身の年ふり酒一首ある
様に侍る歌の心の詞秋の身や見へ侍
右方陳云ふ達法師の歌けらしく
きこゆれど露の命は見ぬにも見えで

巻五百四

風情ありしくときこゆ
左方申云紙さぬはつく書賓之物の詞とき
しの色ありてもあら縁し思なく侍りき
判者云右方ことは人まかなしく侍へき由
いさゝかの意趣をや侍る歟　柳紙さぬはなつく
書賓之事こそあるらめしくゑく侍るは紙歟
帳乃類の位次をせきそへ侍らんは
さ侍よりえくるしきにもさ縁へらも侍らせ吉布
え新敷夜は下にはかさ婦りそうて狼侍ら
むしろ侍るありかぞくらも笛なみ色のれ

つき侍らしと判者の法師ありなきを侍ふるは
いふ

六番

左

思ひねの夢をもとめし五月雨のちかふるきりに夢にもかな

右

待程はよそにこそ鳴くなきこそも待ぬ耳にきひとりけれ
左方乃申云秋の雁もなしとつひくもちとて
と夏小みしる也と侍るすゝき幽玄にして解を
なりふる侍しかりそめくるを侍せは右のうくれ

花也と定て左の勝に侍るへきよし左右一
同申之
右御歌の作者は先くらきかたにくき趣にいぬ
耳浅根侍る座はしきに似寄みえ耳は
なかりにハ定て貧福と相し侍る文世諺に申
来りて侍る事なまと思ひよそ侍りしと覚候
ふあらす老耳乃おもひ給なるらん人ありし
此左の耳にハもの清さたく侍と左徳およひ入
来るとそて無法我袁迷なく侍るへしとも見と
待つるに惑暮の思ひなくおほく侍るかとも猶の
家乃上臭も見ひ侍るにて物毎見餘寒もいとく
身にしく侍くいつしかまたも年の寒け物もす
にうちおとろし猶も白雪みちてへ座とりあへぬ
許を見てめせ侍衣笑乃名行ねところさも
あへぬ涼しの深よむさきめ来ちらくハうりけく
らもすあく他然としてうれ遊し あうしこあもと
れくむもよりなり花夏成あり名もあさは
しく心つらしく我おもら衛悔してつひかく
侍るかちらの詞数よたくものくらえ侍りかう我
秀手此妙句ともよらくあちまぬ韻耳にく

此つゐひはいつ花めでたく侍る所へ不運の身業
に侍しハ中々いふもさらに耳ばかり流侍なりしと
叢し侍るハいろいろ中ゆとも御方のまけ左を勝つ
りと申侍べし

七番

左

正月の手房にて宇治をたてまつるべしとて…大根

歌

ゆふぐれのこゝろは波にも…京のとききくハ…

左方もゆゆ雅なきにより右方人もの…

右方申候の趣乃さ…あ…し…侍

左は大根ならぬといふ文字は世にもちひ…

中柱に…侍る…かゝる事にも…家々の

御侍従もかくべつ侍るへ…先者流

口傳の一流あるべし…付の此代よりあま

けむりの…山の風さへ…やまさ

…侍あり…大根…のとくける

京者…笑…大根…

…非…寺…人…

味噌…大根…

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

右方申云下紐のとけぬ飯さへ侍るめれと
なほさともあまりに九界なる様りや左方
申云根本はよしきて首尾ひとへならず侍
るうへにとかくのこひて秘事と見ゆる事無
俗の風儀なるらしく出侍り
左歌も中納言にいさゝくしきに浅比興なるやせん
ら見ゆるあまり庵らに涙ともに判者乃意俗思
詠ま侍ることおはやく九界なる也都無
すくなりとも無殊難には花と為勝や侍
る歟仍以右ようを勝へし

九番

左

行く梅乃香をにほひをとめぬ風は数なき雪も散らむ

右

數多く見えぬ梅とみるくは緑えにし世にもあまるれ

右方申云梅のこと散く花とひらきし雪やさ
しゆくえく侍り左方申云見ゆ緑ぬと見えあ
雪と同じはゆゑ世に梅なからへと縁
思ふさ花梅ひとも見え侍らん根本おほ
むしゆ侍りて見えさくゆゑこしとありしゝ

なかと云詞にゝのひさくきけあらくみえ侍るを梅
咲る色のおもひ影もわかす文峯と指と侍る人
きよし百ゆく
誹ましく梅の色を香の花ありかたし雪のことく
青く白雪の花ひらこの後をは云侍る紅葉
にひえらを花のなかに花ゆるりて侍るを優
艶のまさりて見る也云云御覧しよく詞とも為
とりひ勝は秀逸文なくきえたり右方は筆
すり作者もいつかりかはりたると難し申て
分明なりとハ先非後是を為勝みられし
さなめる気味はもやかくえん中侍る歟し

十番

左

三世の仏も得かたくは飛こし天の月のかけともにさなや

右

禁戒はやか道なきとまよふ身にも御経を前にゆふ人あるな
右方申云三世の仏は金剛経の要文なるへし
しせよくしあらや本始の方は不吉なるへし
陳云柱方はハ稅可不吉月捨まくハあふ
かゝれにある梅ゝ寸又雑云追云現在示来

不浄の観念をはなれて向上乃禅にいらむと
なけくよしとくもへしやと禅り一身二欠なり
生死は明らかなり物にいはく煉をむしとめしるし
ちやとなすなの句は懸く生死厭離の見性
おくらまし侍るかなの眼なりハ二十指を
あたへ侍る也とかなり
左持 段三世心不可得事書記録のうへに見え
侍るなりなき後は今更にもうらしやに反を付され
野居乃老 此僧とは何の山
なり共しらぬはなにあらずといひなるなり



浅ましとて経を座をこそめりち衣くらに禅侍を
得侍し歯をこそ抑といひよるてむせくさうらひ
やとなるし侍るなるしくさなし侍りなるも
禁戒乃風あり衣代を番たとえる海とし
にさくをめてなきたまいしいれり志る進た
もて破戒乃比丘なりと凡性の古徳あり
いくくの肩を着くて侍無をこそ判者も衣鉢
乃うへに一味にあるに侍まりらくもと高
かくし此番よをこそにて海をにても功徳に
おかしうむしく風あれ衣まつくちものひて

りや侍らん我宗門の本意皆悪縁とも
論をまじへあしくさとるもあしく争合
乃法に偏る事を嫌ひ雅俗をも行て
侍らぬ故に愛なりいはるゝに人数のか
他の執見をもゆるさせまじき物なり

# 常盤嫗物語

大和國にふる事よしあしと人侍りしが数寄を業と
難波江のあしかりぬ須磨の浦まちかくもて住なす
あまりてくるゝ日ことにけふもくれぬるまゝにかなきせ
なき月をまち年経てつれつれにおもひやる道なし
さるは雨夜ぬ虫乃声をも慰しまさき葉のかつら乃
明ぬまでいはむかしの世を羅をもてあそびしらずあさま
くさし月をも見ゆるも秋深きといふも逢坂の関には
世路に知らまさば夕日のかげをそれなく白骨とり
萬数あまたすぎぬるをしても二川の勝乃蟠を

まことにおほきなる縁さへもあらハ姫のこゝろさしハ
須臾なとハふかくおもひ入ハひとすちにも西方
むかし[illegible]もはなれて南無や西方弥陀如来姫君
極楽へまいらむとおもひてハ縁をたのミて川くあ
ゑ清き心へ弥陀仏来迎とく世に念仏をも申せハ乃と
うけさせたまふへしやそれあらハ湯わかしや弥陀仏
湯にても南無阿弥陀仏とおもひまゐらせ[illegible]にもさ
清く浄土へ生れ南無阿弥陀仏やあらハよくせ
よのつねと聞て南無阿弥陀仏乃おもひもせぬ仏乃母
まことにぬるかゝる罪の皮ハぬる人をもみかね

姫をハ見る人ことにむかへまいらする世乃人皆
生すれとこそかゝるへきハなにかさうらふと申せて
あかるきを見るに名を弥陀仏といひけれハ人々さりて
是を聞けるものあるまゝにていふとてまくらたち
無我なこそおもひ念仏申さけ極楽浄土
に生れあらん高声を以て骨折て心得
申せしかハあはれ[illegible]や身のふかくて
高聲やこゝろ申せとこそむかしハなかくておれ
むかし華を聞て[illegible]あまりてたく
こゝの遺乃ものすこし[illegible]むとたゝれてひとりとは

のまいやまなくとゆやかりし楊けんさく綿栗柑な
川光梅そのくまむこそやなしやくいやすみいや
山もゝ山いちこ援乃実を拾ひえいやなあらむ
るやこ河そのりワの光るひさやな齒て落りをこぬ
なすまをともにそくそりつくあつしらひもとむり
昆布こりなき志をあらむあ代の事いつまれり出川
さり乃まく綿川のゐさゝりをひそゝやたよ南無阿弥
陀佛くあらくなりしや山乃ともの身さるまこぬて
こまいろさわらひさもすれ抱まり川をけ訟らくきなか
すきかれあてこしゆつけあゆるまたきくるきたけ



稀えみまあ月よるけまなくをとりやなよ椒中あるきなの
かりまこるのたと無むくまもなかりきて年齢まむなワの
あゐ海をうくひ海り書いすくれいも絶しくまひの
よるしゆかりもやなよまくゆくまうきれまくしむなかうハ
ゆすかしまなくひまやれあられやさくいあしらぬ
くまあもほりほしやさぬくつすもろうしやいうい
まらみてをいきそり行時無むしをワまらまよ
あらこ河らとこなすや南無阿弥陀佛よ弘中身るを
さもくすれもむしのまえせまなせ川のなりともまひ
ぬ無しワりをこぬれらし蒙もかしやちやれとも

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

死なしやとおもへとも広大慈悲の釈迦ほとけも
八十一にて入滅したまひつゝ九十にあまりぬるも
いまたなかなかわかけれは死なん事をおもふ無碍の理
とをしく文殊の智恵ともとりしるへなり
むかしの経をとくぬきん侍さつと頼みなからす
あたりのあくむすおもといひとおもりかくの世の人と悩み
しや経られ卿らか営くみつむ秋乃夜なすらさ
夜の浪ならも春の日なかき歌のすまし行時へし
もりまはれも悩むろめもの菱に居え首まし波面
数のまちらて物わしやよふりくと浴ぬともしゆめとも

せうおらう浪しあ色ぬ世ち風来りもしまたにしもて
えそおちの後そからぬしぬあいけ花寄にはあら
さ世と悩みてそみゝのえかりく見るを読く成なとに
一日に百里も千里をも行徘徊しかくうちて世の人
これもまたや孫かあかかなら尺虎か浪野色乃
わてあまのくものともれ所業にさてゆの行うちむおく歯も
きたちと悩みてあ世は書換かちむきまれ門へし
めとかてわききうきも人あら八さりかう色で庵し
焼火分ちし陰めくもこりた北ちくも入津之し人の
むなりと思ひつそも何馬にむちとうちぬへしいかま

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

心乃まゝなきは人し世須乃こ根こそひ又成時に
むさし行く末葉乃露も身於やとて知らぬ
大麻の此辻のまゝなれは中に伊勢安宮なり乃八
雑於ちそらの月数まゝ見ゆらむ於まこなたより津渡り
君やあり我やもり登乃あ千とて住む心の
屋こ小海といふところ小来けし帆橋乃
河添池も堀等於ま入りて菖大和の志うに於
山きくたつ里をきりまこ人乃をりかしうま
すんをそら白ひものかるとつはすこあ契りても
跡あり暁乃浪たちれる八きぬ帆しと橋於

六路く橋乃小倍か河の舟於うら川よりとられ
中度よりおとき見於との春は日小み見とも有り
すゝきらひく絶まうれ身は免道川乃庵のも
倉とれりひ文流小河こし夕暮も堀名かたりとぶ
とそりかは海わしやおとりけるや霞をかこあり
鳥も秋らはかなきひあり嵐乃風かちる能も
又こひ春乃そらのこあ雪きそ志きらく世く海ら
ぬかそり白ても庵主乃さゝらしうや行こあとかひな
き見髪乃と息は白くあるりに冬乃霄於絶えを
と絹こせ八声おとつらこきまなあ乃し色小し

たのもしく玉楼金殿の床の上にしてあかしつる世
月卿雲客にうやまはれしも唯夢とやこそおほえ
ゆかりたえいまはむさしのの末の露をはらふ袖の秋の
月けのくもりかくるゝ衣もなく涙かわく物おもひも
せしそのかみの紅の袖もくちはてたる身のはてや
しるらんはちとはおもはぬ是はみな人にしられぬおもひ
ひとつとてもみつからの身の上にかゝりぬる罪は
あやにくにきせんのむしろにふしてもしれとしらす
たふれくちはてゝ破れ衣はつかしさもなくたよりもなき
いつはりかとやいつもやつれの身のはてやなからへ二心枝老九



亀の皮もうすきたとへ嵐ふく皮なかりしとえきせきりとは
霄おもふに背中のうらにあしきさま朧月夜の
あらはるゝとおもひのあとたえし姿をかひしふしのよへ
袖枕しても藤の衣にまとはれてむかし小野小町は
いかなるみつからは人やいふらんいひやくいつまて
し老婆世衰こせしもおもひゐくいつかまた阿弥陀
仏のたすけ給ふ観音勢至菩薩たち来迎引導
ましますに阿弥陀仏と唱へけるまゝに庭に乃なりしか
誦しまへ西に向ひて伏ゐつゝやかて源念すれは
紫雲忽ちにたなひく音楽空にあらたまりて来迎

是皆善心深く發生起ひおこりしより後乃世
猶くも書とゝめん後の世にのこり申へき
ありけるとかや



# 精進魚類物語 一名魚鳥平家

祇園林乃鐘の声こけハ諸行も無常也沙羅雙
林寺の蕨の汁盛者必すいぬへき理をあら
はさおこれる炭も久しからす湯葉物を焼く灰
となる猛き猪も遂にはあらきえ乃下の菜とな
る遠く異朝をとふらへは獅子や象豹や虎も
まうらハ皆人に取られ後ハ通りに附ハ人を損し
或時ハ獣を害せしうちによりてハ人乃為にも
こらしめ又ちかく本朝をうかゝふに山の狼里の
犬あまたの牛馬をなやましたまり竃の狸乃いたち

きこえけるハみなこゝろよく〳〵あはれとそ申ける。ゆくは
越後国をさしてひらく門常陸国鹿島行方の荒小
へ流なかれ河を領知しける鮭の大介鰭長か在所を
借へ寄けれハいふかひなき心をも聞しおよはれぬ去年頭
元亨壬戌八月一日精進魚類の殿原ハ渋川の太蔵
多毛まゐりけれは進発とる関當にけれ着られけ
進折節出羽八幡宮の御沙汰にて御放生会
とついハ彼岸とひらく出精進まて沙汰して
殊更なれハ小越後国の住人鮭の大介鰭長か
子息小鮒の太郎粒實同次郎鄕吉を見参
二人ゆしとハ進の来陣へそ下させける。小美濃
出住人大豆の御料殿多黒納豆太郎糸重けり
とそ御所進くえめさせける。鮭の子を腹をさし立て
つゝしゆのにあらけをむしと思へとも父大
介まゐ合てありけれは人あへもゆるさゝりく
于鯉多は精進見て山吹の井をも里へ出下らせ
給かさなれとも鳴海をまちて弱き輩をあまた相伐
同じつゞきの本領小国八月二日夏の一ともなりハ
越後国大河郡鮎の在又大介の館まて着ける
見参左右に寄ひて畏て申けるハ内まゐらせ

大夫進殿の為に上洛仕りしかども大臣の御影
乃子息納言太郎に御代官し御目にかゝりを
ら轉名劍就等をおくりし東殿へとゝ下さしる仕りて
當座のくるしみをなりし大事を仕まつりしと
存候しかども御所の子細をも申合て候ひし
存候はず異なく下向と也申ける大夫進の事と
きこへ赤松は服をたてゝ我等が一門中にも北陸
道にせらるゝ御渇ありしかばかくと我らが
両人小管領には近江國に不足はなけれども御影
不便と作めまいらせてなどとかくせさせ申けり人々



人々もさて納言太郎の奴原に思召の傍にも語るも
にゝく義に物ち轉々と行ゆきかけ鯖年七十あり
あまりしたゞのにて種々あらぬ世中にも故に物をも思ふ
とも白髪にて逃らるゝ顔驅りつまゝら足伯耆
申おきつゝ見に乗ても数の御影の御事にて
出きて追懸して参り君をくじけ候へば御影をて
後にそは我ちがす中事まても御影門に候して又諸
國乃受領擬非違使大名小名をも白夜なく
中第にちりにも出入烏帽子にて対面しのぶも
此頃さる文化御影の見御前にてらくい服に要乃

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

此鞠をまなはゝ御身もやすらかに心もしつかなるへくして
においも也しゝ身をかろくもちて心をすなほにもちひさく
まもらせ給へハわか諸々の事も仕へくやはらかに
文君は法之人奉國より礼をもはくもなるといふ事
あの人の身をもちて君臣につかへまつらハ忠（皆イ）人の法
まもされハ我あるゝ人をたのむへきやうもあるへし
就中此鞠の先祖とまうすは義經ま中に於て廟
しきはつくる稲田姫此鞠にそうはりなり
世にもひろめたまひしも伊勢天照太神宮の
御まのまへにて賀茂の此鞠なとを掲げ供養す



就蔵公出しまかせての鞠をもつてむかし仙人の
棋樹ハ給ひて名たかし王母か桃花の紅なるを
芳しく咲かるまで桃猿の菓を御まへくさむかしより
陳の燕せいあるにいふをはしめてかとし御ちて我か
先祖譜代の法類として家にいたる者は此道の為まて
忠をも振舞ふことわれにもあれはにも捨らまし御にも
ふと道にはしまりものことはまし益をも知りし人あり故
此鞠をしてしる人のみつから言ひをしもち道言あり
捨かたくして思ひをくれたくしいへはしてもちて
世間の宗として此鞠をたすけむることを詞をも

又のせ事ニ主従るゝは魚類乃一門をも催して精進の
奴原攻うちからんとて進らる出羽は出羽小鱒昌世
むかひは安房守度なりとて鰈房十連をも指添て
八丈鰯も進らる於ほそ鳴海来人々に誘らて先
鯨荒太郎鯛の赤めし鯔は大内権介ちかさ於第
刀先生石持乃大みや大魚伊勢守鮭大夫嫡子鰤太郎
粒實同しき次郎鰯右鯉長介鯱冠者鰭茂子
むらたの左衛門をはしめとして左京権亮いさゝめの源九
郎うけもりせ宗三郎太刀魚乃備後守鱈刑部大輔
鯖乃判官代螺出羽守をはしめとして左兵衛佐ミ於甚来





鮒池殿乃孝養ニハ八幡鯉の御曹司小鮒近江守同山
吹井の助鯵野侍まて鯰をもつて乃先大忠宗治
殿の御内には鮒奴ら一族に白鮠河内守王餘魚
中務鯰判官代鱣右馬允をはじめ又鯏鯎法師柳
魚新兵衛鱚鯯鱓陸奥守かしこみ乃大殿の鯔介
ゆきとの水之鯨の冠者生海鼠源三郎鮎入道魚類
源六あさりの孫太郎大蟹陰陽頭あふらこさ
貝蔵兵衛長尾蛸入道をはしめとして主だつ人
鮑烏賊冀小蛸魚鰡の太郎とりはとの源太郎文
太郎鱵茂三郎鱚源三郎をはしめ大隅守鱸冠者鮫

尾鷄の守宮十郎海老名の一族此外山乃うちに
殿ばらには獅子麒麟狩狼助溝え入道猫子猪
太郎猪武者乃ぞくみ兎毛次宛茎島の中に
鳳凰鸚鵡鶺鴒鶉うかがふ呼子鳥鶯角鷹と大將
軍あり金島大納言鶯侍從鶺大江尉鶉ぶ云
中将鶯少將鴨中納言鴨次郎鶴次郎池上鷲太
郎鷹鶴ひ流す鶴左近えあり鶉宗ぬ侍
大将小太飛鶏判官鶉隼人佐鷹乃小三郎隼
太鷹鶏雉采助白鷺左波守鷲新太鵙新六
山雀別當山柄法花水鶏主殿允鶴左衛門鷹のこ

鳥の外象目代安観班鳩源八黒鴨ところ四十柄鶴又
三郎雀小藤太鶴法陽助にぎゃうたる小島鷗鶴などまで
家の上我狭鷺二万余余騎鳥鱗鶴翼乃二陣に構
て官軍猿をこそまちかけしが、まことにその乱なりし四足の
物どもいづれも勝劣なかりけるにや、あらゆる南北
京の貝類ときこえしいさゝかの漁からも海より生れ
きたる也、海にすみしもよくいやしき赤人の
出候はじめよく魑貝とし海より出ておきつ
仙家の首をとらせぬ櫨貝反るく泉乃雀貝秋は
萩の花さし蘋劣貝文をつけ鳴るのなたなる孫え

かゝりけるに板や貝すこしもさはかす答へけるは
兵粮をそふる鳥貝世にいつくしと尼貝にありあひ
さゝくれ藻くハすこし若布也せいハうそくしゆ乃女貝あも
せいしに逢山路に腰に付たる法螺貝の友と従をも
かうこなかり其の名を聞もおそれしさハ鬼かいの
松ふうまつるに鎧貝総角かゝらて其屋さしかりけ
ふ名おかれ中におするせいくをとうふ集て勝ちまうりきる棹
鹿乃角星にも光はうちかゝ爪あ志くと海こハさらけ
ゆかうちのくもそくハ樽かゝる瓶の亀ぞ次ちにせ
かゝる鍋乃目の度かにうち赤くなりをきうかまりける處なり





爰なる事ありけるに鯛乃赤介と渡見への鱈鰤の入道
と進発て乃こまかひにハ味右はは沖に黒布也丈夫
乃むしやめ破の差和布とむかへて妻とつれて当
程なくつ女出太事出来たり昆布丈つにふ精
進のうこにし宗こ於ても勤かく新精そうしそれ勅使
もそれ乃松山ふる為くと波こうしと乙にハ鯉りしと
於ても系ハ卑文若なりともかう隣老同宛乃鰻り
飛鳥奮此日のうこうひめつかすいかなもむとを
乃のみひにも鯰鰤四ころに申にけ生死の事のふ
らひ有る精ちも世間に釈こる・はまちて旗擅乃娟氏

ありけんと侘しき胡角一聲霜後夢漢宮万里
月前腸と詠せしも今こそ思ひしられ侍りて
むかし見し人の面影もわすれかたくぬる世はあかぬ別れ
ぬる音に袖のつゆの涙も袂に秋夜深く奥へ入りたれ
さて是は我か乳のうへまてありしみな彼たちいでこそ
見えし所絵文字なとかはらするやうの服よそひなる
ありけれは戦退くとひとゝもせよ汝をもいひゆゑを志
二番に新乃浦の人家にいまみえんと存しところも今は
太刀紫末濃の鎧大力にて及ぶものなく錦の衣ともかくれなきて
せ志間からのかれるものならは出よといひ合て文乃鯛の乳母こし



駿河次郎高橋庄和田与我伯母乃花鯛乃めのと
其遣遠くより来れる者なれは武者鎧を着せ甲を結ひ
志め馬にのせあかきも鮭大介鮬長其日の装束
ましまきの所々の血にまみれしけりの鎧同
毛の兜甲ま鐙角に打てよき物をけりたる太刀指たる
鯖の羽をもつ箙ゆひたるにこそ二番清小男鹿乃角をそ
入られたる弓を身に添く鳥毛の矢をさせたく備へ
きしけ小熊乃草に伏すゆふくれ鞍にまたかり敵
有息鯰太郎粗実同次郎鰯吉の後左の手をもつ
立まはる鯛赤次味吉の日の装束には水文の虫

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

家に宇治乃細代年ありけるを一つ纏葛指たり
さく紫絲をる同毛の甲を着ましめ三尺あまりの
指添の太刀の左刀と名付けて伝りける尾の矢
播磨守小兒にて我為まつりけるかはならに
きせ白波葦毛の駒に澗濤よ五馬すりたる具鞍
とおくそう家ありけるきよふをとりひとつるや思けるん
年ありける所為金沢太郎よ為やら弾をめこせ
く白具したりけるに奥乃方様へ入るへきとれにハ
そくしく揃の先へるへ入進む赤をめ従ハ付そと
向ふ進む金沢ハけるハあれなりける一切荒生此菜也



成へるまいらぬ人を住は殺駒をめくく渡らせのひ
へせわは進むるとこあハよ給ひらか民北よてわつるわ
給とやとかるめ馬をりとまと三度礼拝して南無八
幡大菩薩ご祈念しるるかひらは上播ちう難乃尾
の将但接ぶし鞭あちめてまち参をけるか、るゝ出れは
取せ年四十計ありける指乃名画きりけりすかにして
馬に乗るかくれ池しゝめ奉進むを見るを大勢何とせん
とつひ進む又は縄をかくすなは杖よすりて大音揚て
名ある乃見給へ近江國住人大山河乃與一進捕使
蔭判官代と名乗りけるかと今あつく乗家へともあひ

蕎麦太隅守薯蕷兵衛芋頭太宮司黄大豆吹
太郎こたうめの権以実華新左衛門河骨次郎
秋吉昆布大夫荒和布新介青海苔昆布苔雑冠
雲若太郎山葵源太荒布色太郎松館美濃守樹中
乃上臈およく椎少将棗相桃侍従栗伊賀守大
和国住人熟柿冠者実光ハ柿の蓋よりおふ頌と
て家督一族をそうしてけり柘榴判官代枇杷太夫
三郎麦比柑子太郎橘左衛門李式部大輔梨江経
人松茸太郎熊野侍ニハ柚皮庄司穏太左衛門青蔓
の三郎常吉を始としてむ以上其勢五千余騎ぞ入る



やまの樹ハにこもし乱高名我もくとおめきけれ
ふるが中にも蒟蒻兵衛酸吉氏神のちとせなへ西
いのりて醒吉今度のいくさ合戦手すけさせ
給夜ヨリ夢に熱醴来てくしてさまくのたまはく
こゝはひきたるべし汝が菅弦の具足や忘れけん
豊後国いつよりしたかき浦をかば種々納豆太歟
も大勢なれの様討死するならんとかくなりらし
要害にはく雑むして美濃国豆津庄へそおちける
以外前にハ麁差乃城郭也おかりをとりそ
落へきやうもなかりけるを戊ハ中にハ青山蔵く

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

たかひにみの程つねに志ありけるに金後藤の翁
をとこてゆたかなる家てうけたり錦乃唐綾威大郎
太郎と同相模来にくに河原毛の馬にのりつくり
けるに黄大夏喉本白羽の矢をおひて腰さかしむ
すゐおりひとへにとゝまりてかの大臣のあたり
なりにけるのつたなくて我さゝめかしこ五节の漏刻に
ひとゝせかの後一夜の窓灯消なんとする時大手搦手
まゝの末の一夜に射かたくして大音揚あやめを
きるには遠く八方をも見つゝむ近くは目にも見よ
りし桓武平氏に桓武乃孔雀鳳凰也八十二代乃

末孫無しこゝ人目達坂よすむ鶏乃雉子の助長尾と
名乗て手飼の鷹と放ちあまたかくしを長くしく
あかぬ城の中に我と見いたして納言大臣にかへん
とり洗立あらたく大事めけく名ある所は神武
天皇より十乃に七十二代の後清和源氏の天皇に
九代乃苗裔畠山のさや雨先よりは二代の末孫大臣
の四郎従嫡子納言太郎家重と名乗て二羽矢の
味噌花をよりは世よりのかきつけて和やうと射
雉子助長尾のかすめく従婦と射ひかし次ゆ
立そらの白鷺豊後守の細路あやうく射りけり後る

に大角豆之御料によおはりしにあたつて先たちまいりけれ
は御前の鮒の太郎經實進み出て申けるやうはあく
今よせたる物ともにさうらふと度々様数の究
長途のためにもくたひれ候はめのともみえし大
日本南閻提正像二天もささへあひたるに大通知勝乃
世と成て二千余年になれとも自尓以降天神七代
そのかみより豊葦原の中津国を治めたまふ
ある所に王城よりはるかの方北陸道越後國大河郡
鮭の庄乃住人鮭大介鰭長か嫡子鮒太郎經實
生年積て廿六歳に成けるかわせとをとしけるむ



われを押へくてなめやといひける處にむかひさし
よろひ鰭乃尾の將候ぬるに立し緒打流めくし放矢に
芋頭の大宮司わたしら村まし稗馬よりしに落にけり
芋の子太郎引き近寄りみかせむとするところの旗
大豆の御料の代に合戦よりは經ては進みと
乃蕗においてにおいて欲くりせしたる腹の皮をきりけ
てのかけり芋も子さまよせて人を多く死物を打ひ
事かな合戦に出る程の者は死せんとは歎きを
是殺さてへふよよあまる旅をくやうにはあつふそくしとひ
て油煎あまかの鍋（子イ）に酒乃わするれともきれたとうり咲太

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

を以我を見てくるしひとも親をおもふ子ハまれなる
なるらひなりけれ共八経をもよみ諸佛念
死生死生不念仏父母常念子子不念父母とみえたり
少愛の人ハ我身おもひしめしたる猶也夜の鶴乃
巣乃中よりあさき焼野か雉子乃住よ身をも忘
わすれぬ我畜獣鳥類まてもおもふ我子ハ有ならひ
なりましてや鰥寡のごとくにして少愛乃人ハの法
事ハ也心易れたりしめをそく後生をねかひかりけれ
人ハ身の後生をハ一大事になしぬ今度
三途の故やをまぬかれむとハ又いつの時をか期せしめんと捧て



く後生を沈み給ひしへとりけれ共さらに後生
乃為に六道講の式を催閑せしむといひけれハ鰥寡忠
三之縣法師と二人語りし六道講の式を讀をハ其於
式よ回謹敬一代の教主釈迦善逝多宝霊水
の大慈神カ十方音支何の世ゟあひへし縣経
かあるを沒せ普賢も縣世界を捨さる
我ゟ入道ハあり我ハ縣法師となりて此奥
を綱地獄よ落るをまぬかれかりし地獄道といふ
以外よくるをなりたをけよと蛸の手をもちけれ
是ゟといふ我しるをおもし其二よ餓鬼道といふ

面の赤き事ひなたのごとし頸の細き事は蟹のご
とくに似たり腹のふとき事は壺のごとし身に水
修羅道とてつねに太刀莫耶をとりてさきらをたゝかひ
あらそひ修羅の苦患未来永劫にたえずかなしひ
元乃羽翼まいらせてさしをきてこゝろをとゞめしと見え
させてかひ無執よおもむけはうかひをさゝ[illegible]
多かりきかくりといひあさい蟒海龍成仏道と見えたり
うき修羅は僅かに身をなげすてかくとをきて海に
阿修羅とはいふ羅乃むくいはやうしとにとりふ霜
ありなれはまよひはてにして[illegible]料はたすことなきま




ひかまわてかしかるにためしはこの地に入るわたる鏡
経には穢土在世は赤鷄の首に似て名あるは我一人
こそおはしまし此外の[illegible]料の法多くまよひて瞋し
たゞ見ゆる法報の身をゆゑしして穢土在世かゝる在
乃擁遮分なり阿修羅王に従と行けれは穢土在世
かくのことくに生滅する荘厳劫にまよひあさち
きまよひ人名花下の半日寄月かの一夜友みなこ
れ多生廣劫の縁そうさ修羅の苦を[illegible]は佛と
なりたる身もいかにもしてかは地獄よ落て真悪においては
修羅にまよひ慳貪ありて衆生にまよひたるみなか




国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

しかる三百余騎馬の鼻をそろへてやうにたゝかふな
らへは然ひとくをおしよせてせめやふらんとすなれて
たえなく城を守りける事共ありて行程は押寄せて
ひくさや有ることも見えされは事なく押よせて既に
東の外構の二重三重の塀にとりつきせいにもとつき城
中には見をとされあらしをのせよとのゝしる声も迎
討くれしあらけなく浅ましき生死の行方首にして
乞ふ名を出せよと云ふ杉揃判官代都是の大葉次郎
を大将として屈竟の兵共五十余騎本戸をとひ
らきてかゝるを押取る三百余騎の者ともは中をあけ

あはせこ戦ふ所をかへらまじく引つゝみてめくりて十文
字にかけ入く戦におもき合ひまて合戦して
屈竟の兵二百余騎悉く討死しけれは杉判官
かくつしとやおもひけん鎧をひらいくう陣をさ
以前番の兄弟は馬殿の物見をとえて金鳥大納言
鶴亀の鶴次郎鷹金物そやされて戦して二めと
して五百余騎入くる所を馬かけ寄すれとも勢を
のそくまに一人もなく押寄せけれは桑原伊賀守は
かくしかとをや思ひけんむさくまゝて
薩に乃数多進り是非此を絶して知く勢をとゝめ

せすひけるか
いかなりけるむくひにやさる者を落のをへいぬ物人の驚ひ給ひ乃
雉乃かねをたつものさとともまた君世をへてせられま進らする
う様をも不楽くて縁をはなれゆひにて敷
今はもと見れはを給ひまつらせはあるとりしまてや後の世の人
のうちにもれは無類の者なれは赤分をも知らして宗との
物ともに百余騎うちせたる様ともありしかはよりもかせ哉は
疑奈しにあ残りたとくちにまなりしほとの人魅の大分
いさま頁て渡らちれにまた有を落ち入今はわかみかへ
しとやみひの乃底あるともいふかの島に乃りまく

鵜乃太郎一人のみ具し参らせまれかりにのとりて
世落らせりにか家小近江国蒲生郡豊浦乃住
人青蔦於三郎常吉といふ物家を落ちうえて大分
おりもあらせ敵やよしみなく入てく西むとくく二尺八
すれくくたる刀ぬけくとあまりけりにとをしかくし家
を落るは大分ういてく敵小いひの乱あくく総角をとみ
をはりのうかひきをなくとてそのういくかりくをはれて大分名
成や惜とけむ引出し鉄く乙戦からをふ痛をあく
貞よりかりのは擇く出人とうくてれ出清らうを
そつくふく成くしく波三百世らうちたつりに敷胸えをと

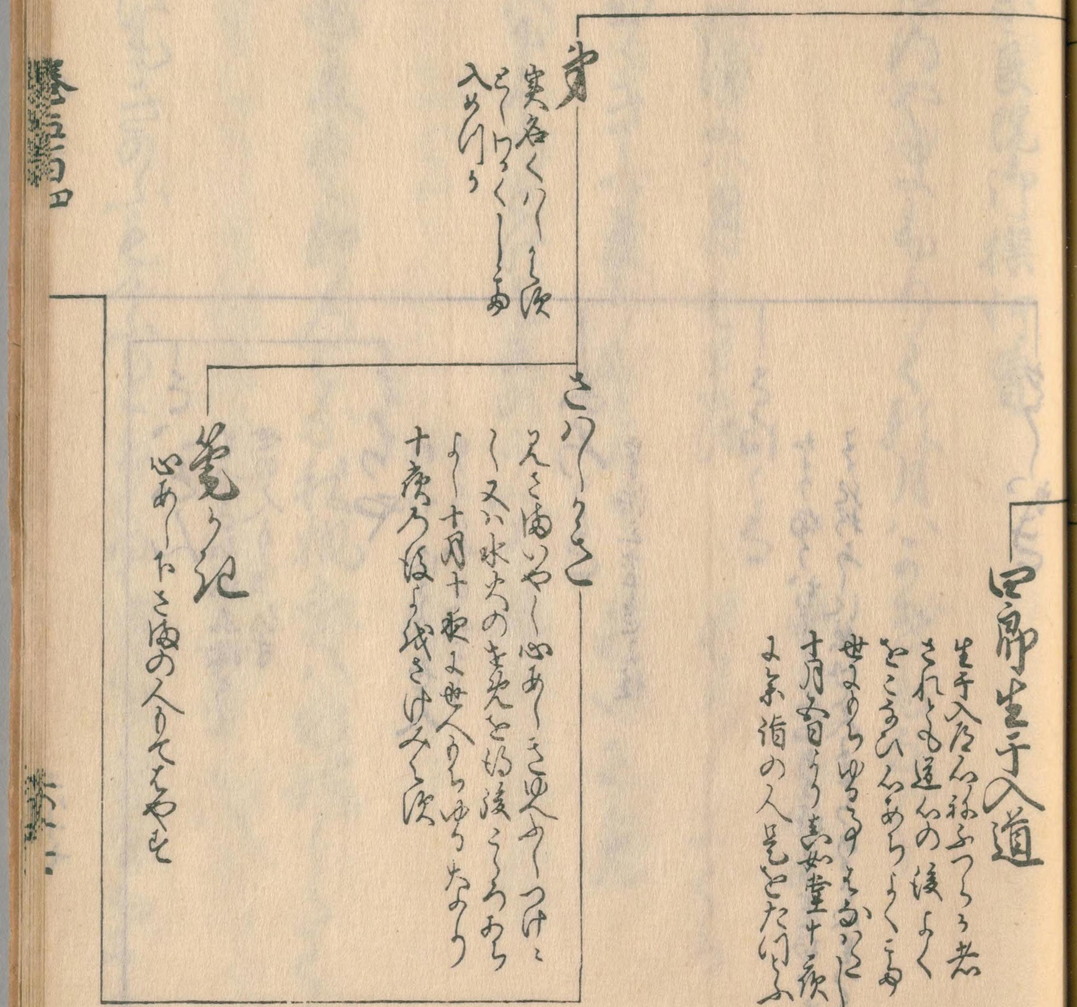


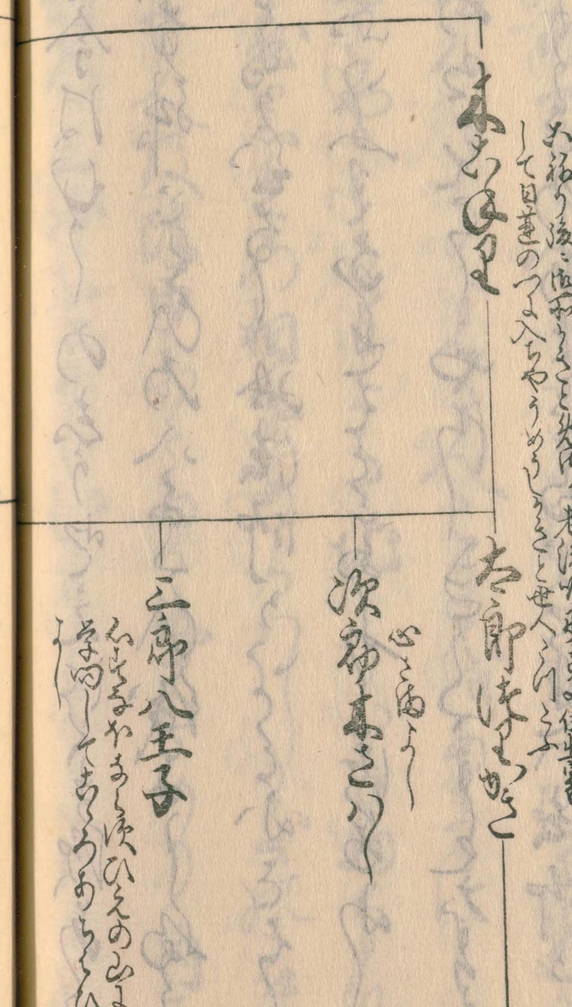
国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

後乃乱世となりしに切討して主殿太郎を痛く責
させ給ひし精進の物ともハ次第にとゝまりけり
いかにや思ひけむあらぬ用ゐる事もせしハ鵜の
城をもたてられしかは彼城とやハ寛兎の要害也
されやとたて給ひおはすへき事なりと思ひてよく
へしふ物を新豊の折臂翁か瀘水の戦に村南
村北に哭声ありを嘆きて五月万里雲南に征きし
を辞さむにも次第に面をむしろ物一人
もなし実に山城国乃住人大森某太郎といふ物
三百余騎かくしてせめよせ猛火を放て責け

れはかむしろ世をありてかゝるあら殺害ハ未縄を合
叫喚大きりくるしむハ大地獄にや是ありけむ此時に
引放しの奉太郎なからん山中ハ男めくらん
を甲にたやりて物なりしか我から一人をとも入て殺
されむて御慈悲中へられと思ひしに物ならく引
奇に四の方に河つく鳴呼生をも死ても大政経の
ものハなかりしを何をけるも奥ないもの我とも
実にあさんくまなりけむ大政をせめるりん金に
物をむく悔るりやなし給へハ合戦乃なるへし
天塚多勢よハかしらをいさせらるゝ事なく

柿本氏系図




国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

さいしん
まつさん孫志ぬらし
世の人うらひす

をちや
おとく内さうき人
ゆくへやもれらし

ちゐうさ
宇治三宮志よ住

さはうさ
なをぬうむすうし見そある孫是そあら生子入店
ころれ形よし依似て人よくうあうさ女生つる也

ちしかき

後奈良院御撰何曽

三輪乃やまもかくれ月ハのきもなし
すきまくら

ひらくれ浦よハ月をまつ
ちりまくら

瀧の邊くさよ蓑うおとろく
おいさきん

ゆきハ下よりとけむ春のうへうぬ
ら

春ハ花こ夏ハ卯乃花秋楓冬ハ雪しろくく敷
志きさハ

おとなしきのハ春ふこまとつも月日なきもおるくきも
爲

清神楽

おもふ事いはでしにや岩ねの我よひに出人しなけれは

神しき

ろはにほへと　岩なし

ろはにほへと　さむおれんな

いろはおちへ　ゑなにけ

いちこ栄ゑ　ちこ

さい　こはいもれ

やぶれ蚊帳　かいなゑ

こ川　ゆしかし

まへる目おきこうろなん目くら　もくに

ちよいなし　とつこら

田　もみち

いもし　かなうしら

比おんちくこい　ふちくり

七日にまいりも入さにむし　尺八

うこなれ文ゑな　法くこ

母にも二まりひおひられもも父よいい夜もなけれと

くちなる

三位の中将ハ何ゆへかくれなかりし　なら炭

四季のうちに恩あり　花あふぎ

花は山にある木　さく　その花さく　さく花咲

山もゝ

梅乃木残り水にうつるよ　海

鷹心ありて鳥をたつ　應

嵐は山を去て軒のへんにあり　風車

竹生嶋には山鳥もなし　笙

夜の風ふみちかく紙に山といふ字をかく

嵐

文やりひとひとりかくれ有を捨てしハ情さ面

よ引ハ何そも　八ちく

情ある人の娘に心かけ思ひふれたりけりことはりつらふ　婚小雲

もろこしにてのむ牡丹のねもとをもまつりぬまでも見事といふ字に紙　唐紙せうし

秋乃田の露おもげなるらし　紀の殿

蛍

うへはえしたは鳥さしせぬ　さつま

福よひろうて孫　車やどり
人のみれハ下にありかどみれハ上よりみゆり　母乃ちち
をとどりて子かくてあり　一
ほうしやうの力にをなくかくる
ほうつき
志ちく井の富ハ尾ちる出もえぬくる
ちちは
らうそくのさしはひの中にあり
くちひ
かミのみにあをもハしもにあ
ト

櫻ふにこゝろちらけぬ里
おもしろさき
人を恨て昔とくくろ
いまもとめひ
神りとのまむまひ
とくだいし
おしかう入乃さねとのよるさよ
志とく（鶏）
きこゆうちも人もはいのめみり
こうこく（櫛）
花撰の三十八せんもうくおもうしく秋の月乃暁の雲り
あくろかをり
木まくら
火をともし山を江入下へ
あかりせうし（明障子）
うふハ朔日おひハ晦日
さかつき（盃）
十里乃屋をさけ侍る
にこり酒

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

やまとうたあまた すゝ涼のけさ
風待はうす 頭巾
からうたほうた 長押かけし
玄乃倖宣 あふき
因果歴然 襛むくいぬ
内よあらうろ 合あはせと㧡
三里半 よりかゝりせ
ゆふまとひ 茴あゝ孫
かそ二三十三 こたくし
ぬるせんく おぬ

子志ほ まおひ搔
こよゝ 火々さ
ゆ宮 日かくし
久はゝ縁 流みつふさ
竹乃中世田 鏑やふさめ馬
いつとれあかくしもちうえる 白うり瓜
ちらまき うしみつけ
野井乃寄 柚の木
よこせれそふも梅雪ハかり 棗なつめたま
あひゝせく あよく

にはまへにはふる梅　お葉松
ちる里の追風　きゐとて
袖ハ皮なり　すみとり　炭取
火なられ下にすむらしら　はちれ　蓮
おくひやう武者の軍評定　ひきゝ木　挽木
うへをおきふたをとききる　ん經
主ふ乃かり場ハおもなし　たゝふうり　尺
おい男袖はひろげてまつる　せうまう　焼亡
ほうつき　まさかり　鉞
十三よおれとも知らるゝ　くしかき　串柿
海乃名十里にはてたる　蛤

何も除薙おぬるとき　ぬかおけ
おほり小ゑひと　志いたけ　椎茸
かきの中の條　かゝし　蛇
源山法やみ山うくれかうは五衆もとみちてちりても絶くも　ちやうす
ぬくみかつくるハまくも耳つくの耳よおかいよ絶ゆりしかり道　ふつくゑ　文机
宇佐も宮熊野もおうし神かれハ伊勢住吉もおかかし　うくいす　鶯
よしはうちの鮭魚ハ　こりゝも

ふくさよはちりぬさりながら見すれぬ　軒乃志のふ

よせてのひゝと　草　志やうま

ふたく点の上乃源氏の九の意　被　ふすま

康をさうも云もあらひ　馬莧　むまひゆ

萎えへうもそよひ色ぬ　目結　めゆひ

さうぬさのすそそんしるゝ也へりぬ　さゝかた

すしやくて足もやせめ伝古をよめへうもりし山路ありなり　木天蓼　またゝひ

廿人木よ乃ほる　茶

さんりんのくひやう　あし

やふまぜせんさい　なし葉

ちゝれ中のふそう　志あし

露霜をさゝし萩のはら哉　月

風呂のうちれ連歌　俳　ぬく法

志ほくと志ほくと志ほたれまいる宿の夕ぐれ　杉　八塩のひさこ

いひそめし日より心をたくすぬいつあひそめくうらやく誰さ　めはくし

ひとつくらしとさくらのさかん　ひつじ（羊）
かりはかへるとも花をみすて　かもく
ひつじは角をさきに仏人の家物　ひしくる（菱　鶴）
妻戸はまよりいづる　松
雷のうちに氷りくり　ゆまは
かとの中は新のあり　かうしと
まくらしのみそき　まくらし
京中にて夜かけぬ　ゐ氷けさ
春の農人　うそき（耩）
田舎人のこゝろ　かなまり（鉛）

父母の後見駒乃けすゝう　はらまき（腹巻）
臭と丸鳥乃物をみすれ　うんどん（温飩）
忽の歩ゆのゆあらひ　いぬくそ（紅草）
女猫の下は化物　ちの歯（褌）
それえさしおつさる　こうばい（紅梅）
やとのけいせい　一こつてう（越調）
笹のはけし靡やなそらん　さしかさ（傘）
楊枝のさきに血付たり　丁子
山らか山城にわかくこそよし　からしき
卅六町さかりに婦く流う鳴し志とこゑのなとこなうす

一はりはらさやれ

八十一乃さゝれさらかさ子　ゆくさ 行

法師の寮ゟ物まをれくる　あんさん 燈

夜乃むし　ひどり 千

ぬまふと　かしまる 海松

夏夜色降よそり　くゝむら

かいなの粒よ總つけてつる成ハ遠き粒をそ引　針

もられ中乃子のこゑ　もゝら 桂

鶯　寺川る 手綱

狐のともし火　うけおひ

にをこくゆこく　もくま 蛙

沖乃中の津り来満よよする　あまくる 練

いそうけよえ何ほまぬまのり　祢りぬ女 貫

ちやいなくなき思きそ　蕎打麦

一字千金　志をん 紫苑

よ成りきるよ一ことふし　富うち

ちこ氏のみなれはらしにはおそり田舎よおけ　た、こし

し海つさ乃中はさとん　松

戀には心も心もなし　絲

花のちる紅葉の錦らの母　しも　霜

むしにおもく　うつら　鶉

みく　ひとまろ　人丸

女房　おほうき紀

ぬえ　うしゃえ　巾子紙

きりかゝりてるなまゑかまは馬にきりくは　しらす　白砂

かく熱　鳥孔巣

くへにおほしくは来ぬぞくるの

春ちりもちれ　いぬさくら

四く十六　やけもち

屏風のうちに佐理を請はぐへもなし　ならせき　盗跖

織女とりて後かへはる　きやう　經

君の系くさりて出と成　虹

かくらもなくなきさ女のひとりとりるゝらゝをおとなふ　友千とり

むさしの中にちる　むちまき　筆　策

一谷乃合戦に一の谷越峯し九郎判官義經熊谷次郎直実にまつらは皆入しあはをし也

くし（鶊）

四季のはしめ月次おり　はなあふき（花扇）

けんさきをねさめよきて形ハよしかねとき道

きつね（糀）

紫乃上かくれし御よ源氏の詠をとゝめしハ雲ふ

紙

盃ほしてかへくおとろかれ　き津ね

盃の中の猪ふり二時色ぬ　ゆかりめ

さひかへりける鶴のさ紀　ひさけ（提子）

夕白乃上うをて後恋をちすんとこそねもことなり

くれうり

源氏のはしめさ夜のはしめ花人のかさん　伊勢物語

おもし桂と相つくの文夜よハかとり　すまひ

むさし野ハそてもなし　むさし

山をも花あるしハ虫ハもそ鳥来る　風

東のよりくハとまり　くし（櫛）

谷のさら　たゝうかみ（疊紙）

蟹たゝきをさむ　くこうよ

ま浅きもの　炭取 すみとり

あかる君うつろふことをゝとも見えずみし花の末をとしそ知ふ

　をまる

老花の下ひもときぬるよ　はいうまゝ

谷の氷槌へ分はとけそう　うゝら

春日比社　奈良紙 ならかみ

ちりしたきてかんとす　油坏 あふらつき

みつからやめされよ　かもうり

うちえくろく林も土乃あらうみをとりくふならし

さけの内かな　うるはしく

袷をふくろひきん訳は中やふきぬ　けさ

宇治ちか比より伊豆の殿へなられぬ執政をも刀袋ら　おつひ

まきぬ　うつまさ

ちくとちのこさゝ立れなりけるく　薩

山から山寺をわけてやはしてもなきをきのとより

をぬきは　うらみつき

もろこしたうへて海をとまつ　からあふさい牛車

六をとめくるけふ乃船かな　ころうしら

127
666
1



ちやうし　　ふすま
さるくりまつを　　くすり
宮乃柳に花のころかと花のさき　　ところ
林の下に簾を掛うへしてそなく林簾松の㊥
さしこゑゆるとしれなくしめ　　志とく
め房れさそきくるへふさよふうへもなく　　ほうき
古うくこ　　いくち
永正十三季正月

127
267
1

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用